

とし、投与30分後より、骨盤部、下肢、軀幹部、上肢、頭部の順に腹背方向より、スキャニングを実施した。2~3の症例において、ferrokineticsによる造血能と活性骨髓の拡がりについて、比較検討すると、正常例では、腰椎下部、仙骨、骨盤を形成する諸骨の大部分、大腿骨上部、胸骨、上腕骨上部、頭頂骨にそれぞれ活性骨髓の分布を認めた。慢性骨髓性白血病の症例では、鉄代謝にてPIT 1/2の短縮、PIT、RITの高値等造血亢進の所見があり、骨髓シンチグラムでは、大腿骨全域と下腿骨上部、さらには踵骨にまで拡張像が認められた。低形成性貧血の症例では、鉄代謝にてPIDT1/2の高度延長、利用率の低下、肝臓部活性の高値、仙骨部活性の低値等造血能低下の所見があり、骨髓像では鉄代謝所見に一致して仙骨部活性は欠如しており、さらに腰椎下部と骨盤部の一部を除いて、他の部分にも活性骨髓を認めなかった。

*

5. 胎盤スキャン時における RI の胎児への移行に関する実験的研究

藤森速水 山田文夫 米川和作
浜田和孝 木村雄一郎 幸前忠興
(大阪市立大学 産婦人科)

産科領域において診断の目的で、妊婦に RI を用いる場合には、母体のみならず、胎児への影響を無視しえず、母体に投与された RI の胎児への移行を検討することは、臨牞性その意義が大きい。よってここに頻用される RI の母児移行を追求し、RI 投与の胎児への影響を知る一指標をえようと試みた。胎盤位置診断には最近主として ^{99m}Tc -albumin を用いる報告がありますので、今回は ^{99m}Tc -albumin についての検討成績を発表いたします。研究方法は妊娠約25日目白色雑系家兎の耳静脈より、3mCi、および30 μCi を静注後、経時的におのおのの妊娠家兎についてまずシンチスキャンし、のち家兎を切開して胎仔を取り出し、母仔諸臓器の放射能をシンチレーションカウンターで測定しました。各実験から現在実際に人体に使用されている低濃度を用いたとしても、やはり高濃度の時とほぼ同率に、胎仔各部分に放射性物質が移行されていることがわかった。使用量が少量だけに、すでに24時間後にはほとんど胎仔各部分への移行は測定不可能であったが、いかに短時間の胎内被曝とはいえ、胎仔への影響が全然ないとは、本実験からでは断言できないが、現在の段階ではやむをえず胎盤の位置決定として RI を

用いる場合には、胎内被曝線量を考慮して用いるべきであると考えられる。産婦人科領域において、この点を十分考慮にいれて、RI の応用を検討しなければならないと思います。

質問：鳥塚莞爾（京都大学 放射線部）

胎盤シンチグラム作成の婦人科領域における診断的意義を御教示下さい。また臨床的な使用経験がありましたなら御教示下さい。

追加：藤森速水（大阪市立大学産婦人科）

胎盤の位置を診断する必要性は、前置胎盤の疑いとRhH 血液型不適合時、子宮内輸血を行なう場合、胎盤を避ける必要からです。もちろん、他にも種々の胎盤位置決定法はありますが、現在のところ、 ^{99m}Tc が便利と思われますが、産科的には胎児に対する影響と性腺に対する影響を考慮する必要がありますから今回、今日迄の研究を報告した次第です。

質問：刈米重夫（京都大学第1内科）

胎盤に RI-アルブミンが集まる機軸はいかがか。また集まる場所は母体側の胎盤か Fetus の側ですか

答：山田文夫

^{99m}Tc アルブミンが胎盤部分に集中する機構についてはまだ明らかでありません。母体側、胎児側のどちら側かも不明です。胎盤における血液のプールが設立しているのかも知れません。今後これらのメカニズムについても検討を加えたいと考えています。

質問：松岡 敬（大阪大学 阿部内科）

^{99m}Tc -Albumin を作製するさい、Albumin-labelled ^{99m}Tc と free ^{99m}Tc を分離したか否か。

胎児へ移行した ^{99m}Tc は free のものか、Albumin-labelled のものか御意見をお聞かせ願いたい。

答：木村雄一郎

^{99m}Tc アルブミンの胎児への取りこみはアルブミンの型で移行しているものと思われる。

これら化学形については今後、検討してみたいと思う。

*

6. 脾臓シンチグラムの臨床的価値

倉 尚哉 内田立身 刈米重夫
脇坂行一（京都大学第1内科）
高橋 豊
(天理病院 内科)

脾 Scintigram は、ここ数年来、日常臨床検査として